新春

むかしばなしで海老名めぐり

〝むかしばなし〟というと、みなさんは何を思い出しますか。「ももたろう」や「うらしまたろう」など、だれでも知っている昔話から、生まれ育った土地に伝わるふるさとの昔話まで、様々なものがあると思います。わたしたちのまちにも風土に根付いたたくさんの昔話があります。今回はお正月特別企画として、すごろく形式で海老名に伝わる昔話の一部をご紹介します。ご家族そろって楽しみながら海老名の歴史の片りんに触れてみてはいかがでしょうか。

【あそびかた】

海老名市の東端、街道が交差する地点の東柏ケ谷からスタートし、いくつかの昔話を楽しみながら、市内をぐるりと一周して市役所のある勝瀬を目指します。

家伝の妙薬（かでんのみょうやく）

ある夕方、上郷の農家の主人が相模川で鮎釣りをしていると泣いている娘に出会った。渡し舟が来なくて家に帰れないというので、自分の屋敷に泊まらせてあげることにした。

深夜、娘は天井に吊るしてあった鮎を飛び上がって取ろうとしてころび、けがをしてしまった。主人とおかみさんは、娘に傷薬を塗り手当てをしたが、非常に傷にしみる薬だったため、娘はものすごい声をあげると、狐の姿になって屋敷を飛び出していってしまった。

数日後、屋敷を訪れた娘は手当てのお礼にと食あたりの薬になるキノコをくれた。これを煎じた薬は「家伝の毒消し薬」として明治の初めまで伝えられていたそうである。

彦六（ひころく）ダブ

彦六は鳩川に落としたナタを拾いに水中に入ると、きれいな女の人に会い、三日三晩もてなしをうけた。開けてはいけないという宝箱を手に村に帰ると、実に３年が過ぎていた。彦六が宝箱を開けてしまうと一瞬に消えてしまった。その夜、村人たちは、天女が彦六を雲のかなたに連れ去っていく夢を見たそうである。

有鹿姫（ある　か　ひめ）

500年ほど前、有鹿（河原口）に嫁入りを控えて海老名に来ていた愛川の武将の娘が、父が戦に参戦したという知らせを聞き、実家に戻ると、父母ともに戦死していた。生きる望みを失った娘は相模川に身を投げると、娘は恐ろしい大蛇に変わり、相模川を下り始めた。有鹿に近づくと再び人間の姿に戻り有鹿神社の裏で息絶えた。神社の氏子らはこの地に嫁ぐ日を夢見ていた娘の死を悲しみ、有鹿姫の名を送るとともに神社の片隅にその亡骸を葬った。今でもこの碑は有鹿小学校の敷地に残されている。

三島社の神木と大蛇（みしましゃ　しんぼく　だいじゃ）

三島社の境内に大きなツキ（槻＝ケヤキの一種）の木があり、その根元の大きな空洞には大蛇が住んでいた。大蛇はたびたび周辺の小動物を食べていたらしく、村人から恐れられていた。

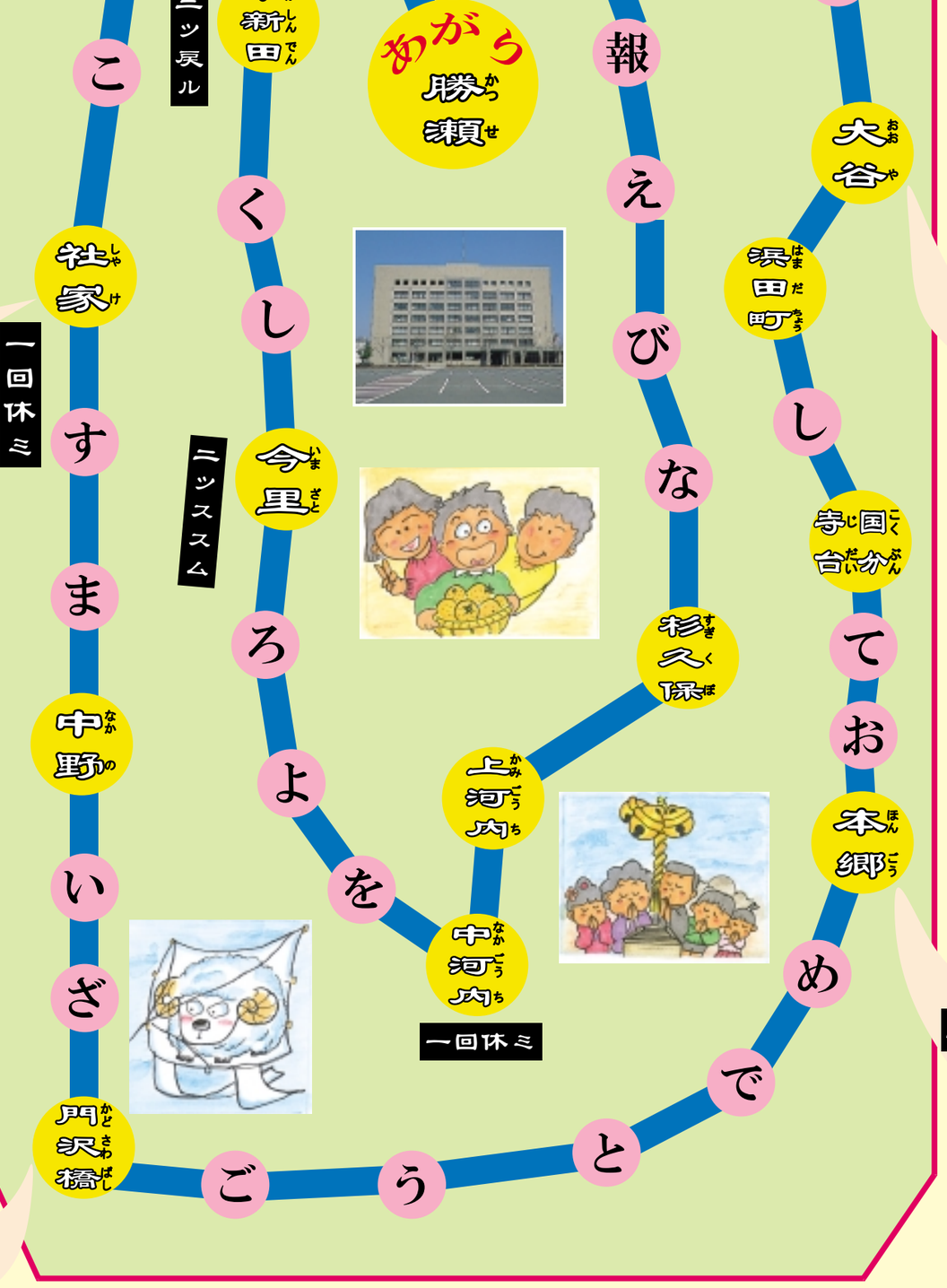
ある日、神社近くの池に洗濯に来ていた農家のおかみさんをこの大蛇が食べてしまった。殺生をする大蛇に神様が怒ったのか、ツキの木から突然火が噴き出し、中の大蛇は焼け死んでしまった。焼け跡の大蛇の骨は四斗樽に三杯分もあったということである。

戸田の渡し（とだ　わた）

「戸田の渡し」とは、門沢橋と厚木市戸田間の相模川を往復する渡し船のことです。なぜか相模川の渡しの名前は、河原口付近の「厚木の渡し」、社家付近の「岡田の渡し」寒川町の「田村の渡し」「四之宮の渡し」というように、いずれも右岸の地域名を取っています。

「渡し」は橋がなかったころの重要な交通手段で、特に丹沢山塊にそびえ古くから庶民の信仰の対象として尊ばれてきた大山への経路でした。経路は「大山道」といわれ、いくつかは市内を通っています。そのひとつに「柏尾道」という、横浜市戸塚区近辺を出発点とし、藤沢市を抜け本郷、門沢橋と進んでいくものがありました。門沢橋村まで来ると相模川入り口にある不動様の前を通って「戸田の渡し」を利用したのでしょう。

不動様の台座には「天下泰平　村内安全　安政二卯五月二十八日　門沢橋村」と記してあります。今も不動様と大山は変わらずに私たちを見守ってくれています。



五ツススム　ぢぢい田（だ）

鈴木勘兵衛というおじいさんが目久尻川近くの田んぼで稲を刈っていると、いたずら好きの河童が尻を叩いた。何度も何度も続くので、ある日、勘兵衛さんは小石を詰めた袋を尻にぶらさげて何食わぬ顔で稲を刈っていた。何も知らない河童は勘兵衛さんの尻を叩くと、あまりの手の痛さに「ぢぢいの尻は石尻だ！」と叫びながら、逃げていった。これにこりて、河童は現れなくなったそうである。

尻尾で油を盗んだ狐（しっぽ　きつね）

一回休ミ

大谷にあった油屋にかわいい小坊主が夕暮れ時に油を買いに来るようになってから、油の減る量と売上金が合わなくなった。油屋の番頭が油を買いに来た小坊主を見張っていると、なんと大きな尻尾を着物の下から出して油桶に浸し、たっぷり吸い上げていた。後を付けると稲荷山へ行く細道の途中で姿を消してしまった。それから小坊主は現れなかったが、少なくなった油桶の底には狐の毛がたくさん沈んでいたということである。

五ツ戻ル　名木ナンジャモンジャ（めいぼく）

周囲６㍍80㌢、高さ20㍍、樹齢約350年、ナンジャモンジャと呼ばれるハルニレの木がある。

この大木は350年ほど前、医者の半井驢庵（なからい・ろあん）が当時の本郷村に建てた別宅の敷地に、朝鮮から持ち帰った種が生育したものであるといわれている。

何の木だかわからず、だれともなく「ナンジャモンジャ」と呼ばれるようになった。

ふるさと感じる一冊　販売しています

市では、えびな伝承文化叢書として「海老名むかしばなし」第1集～8集と「海老名の坂」を市役所地下売店で販売しています。

「海老名むかしばなし」は、郷土史家の池田武治先生、故小島直司先生をはじめとする多数の寄稿者によりまとめられた、民話として語り継がれてきたものや史実を写真や図版と共に収録しています。

もちろん今回紹介できなかった地域の昔話もたくさん紹介されていて、みなさんの郷土を知る一つのきっかけになることでしょう。

また、市内には古くからの呼称を持つ坂がありますが、多くは先人たちが生活にまつわる故事や特徴をもとに親しみを込めて名づけられたもので、これらをまとめた「海老名の坂」も身近にふるさとを感じることのできる一冊です。

ぜひ一度お読みください。